

過去の【今月のコラム】 2024年2月:コラム

「再会で思ったこと」

「先生、私のこと覚えていますか?先生が話すので参加しました!」

先日、オンラインの研修会で吃音について話をする機会をいただきました。話が一通り終わり、参加者からの質疑応答の時間に言われた突然の言葉でした。発言した参加者は、新採用時に学級担任をした際に受け持った男の子でした。当時元気でおしゃべり好きだった男の子は、落ち着いたアラフォーの男性に変わっていました。突然の告白に対する驚きと、懐かしさ、何より嬉しさで気持ちや行動が落ち着かなくなっていました。新採用当時の私は、授業や学級経営でうまくいかないことの方が多く、楽しかった思い出とともに、当時の子どもたちに対して申し訳なさを含む苦い思いもあります。それでも、懐かしい様子で先生と声を掛けてくれる教え子に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私は、今年度、教員として30年目を迎えました。通常学級担任から教員生活をスタートし、ことばの教室、特別支援学校、難聴学級、知的障がい学級、情緒障がい学級など特別支援教育に長年携わってきました。現在、3度目のことばの教室を担当しています。歳のせいか、最近、教え子と再会する機会が増えてきました。教え子たちは、就職し社会人として頑張っていたり、素敵なお母さんになっていたり様々な姿を見せてくれます。当時、指導で手こずらされた子が、しっかりとした社会人になっているのを見ると、人に内在している成長する力の大きさを感じさせられます。

子どもの将来の姿を見据えて、現在何をしたらよいか考え、日々の指導や支援の手掛かりにすることが大事であるということが、特別支援教育で言われます。障がいがある子どもを思い遣る気持ちはわかるものの、私はじっくりこないものをずっと感じてきています。そのじっくりこなさの一つ目の理由は、「人生はその子自身のものである」ということです。例えば、周囲の人のほとんどがうまくいかないだろうと思うことであっても、当事者がやりたいなら挑戦するのを見守る態度も必要だと思うのです。大人が、邪魔なものを除けてあげて、安全な道を歩かせるようになってしまわないかということを恐れています。二つ目の理由は、将来を見据えた指導・支援は、どうしても訓練的な要素が強くなりがちになってしまうのではないかということです。目の前の子どもそのものにスポットを当て、その子のやりたいこと、その時点でできる力を生かしてあげることが大事だと思います。その子どもが今、笑顔で楽しく過ごしているかが指導・支援の良し悪しの基準だと思います。偉そうなことを書いてしまいましたが、この考えには私自身のこれまでの反省があります。

もうすぐ、3月、別れの時期を迎えます。子どもたちの力を信じて見送ってあげたいと思います。そして将来の再会での驚きや喜びを楽しみに待ちたいと思います。



2024年2月 子どもの発達支援を考えるSTの会 生江英一
(福島県伊達市立上保原小学校 教諭)

2024年1月:コラム

「あれから29年」

皆さま、新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

さて、タイトルを見てピンとこられた方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか。毎年12月に入ると新聞やニュースでの報道が増えるので、お気づきの方もおられるかと思えます。「あれ」とは阪神淡路大震災のことで、この1月17日で29年となります。

当時、私は2歳で神戸市に住んでおりました。被災自体の記憶はないものの、両親の話や小学生になってからの震災学習では自分の知っている神戸の街が悲惨な状況に陥っていたことを知りました。毎年神戸の小学校の大半は1月になると“[しあわせ運べるように](#)”が今月の歌になったり、[ルミナリエ](#)（今年は1月19日～28日）があったりと非常に身近に神戸という街の被災体験を感じる機会があったように思います。

言語聴覚士になり、日々の臨床の中で、ふと「今、自分の職場に来ている子ども達が被災した時に避難所に行けるのか。避難所開設側はどこまで発達障害に理解があるのか。」と思うことがありました。その後も、普段と異なることに対して敏感な子どもが避難所で生活できるのか。偏食のあるお子さんが避難所での非常食を食べることは難しいだろう。と考えれば考えるほど、ハードルはかなり高いのではないかと思いました。大人でさえ、避難所生活で疲弊してしまうなか、子どもとなると難しさは増す一方です。

そこで、私自身が公的施設に勤務していることもあり、公助の部分の中から変えていけるような啓蒙活動ができれば良いなと思い、県土会の災害対策部に入り、JRAT（日本リハビリテーション支援協会）の一員として県主催の合同避難訓練や研修に参加させていただいています。

今回は研修の中で、よく実施されるHUG（ハグ）と呼ばれる避難所運営ゲームについてご紹介させていただきます。グループで実施するカードゲームになっており、避難所の図面と合わせて使用します。カードには、居住地・避難者の名前・性別・年齢・家族構成・備考が書かれている避難者カードとイベントカードがあります。そのカードが主催者側からランダムに配布され、避難所のどこに避難者を割り振るかというゲームになります。正解というものはなく、いつも終了後に反省する部分がどこかしらにはあります。中でも、カードの備考部分が非常に悩まされる原因になります。備考には、持病や障害などが記載されており、「この人は体育館で良いのか、教室やダンボールベッドの方が良いのか」を短時間のうちに判断しないとイケません。次の瞬間には、また新たな避難者カードやイベントカードが配布され、その対応に追われます。その様子はリアルな避難所の受付といった様子になります。「もしかしたら今来ている人よりも重度の人があとからくるかもしれない」という不安や限られた資源の中、最適解をその場で判断しないとイケない練習というのは非常に良い経験になっているなと感じます。このようなゲームは特に避難所を開設する地方自治体の職員には是非していただきたいなと思います。さらに、私の勤務する自治体の災害対策部や避難所運営者に向けて、発達障害のあるお子さんにはどのような配慮が必要なのか、今後、研修などを開催し、伝えていけたらと良いなと考えています。

最後になりますが、今年の日本言語聴覚学会が神戸で行われます。現在、私は実行委員として開催に向けて準備をしています。学会では、阪神淡路大震災から29年ということで、災害シンポジウムが組まれる予定です。阪神淡路大震災で被災したSTがどのような経験をしたのか、近年の自然災害で被災した地域のSTにもお話をさせていただく予定です。

また、当会の中川信子代表が教育講演を実施する予定であります。小児分野で働くSTはもちろん、成人分野で働くSTに小児分野に興味を持ってもらい、子どもの発達をサポートするSTが少しでも増えたら良いなと思

っています。ここ4年は、コロナの影響で子どもSTの会としては、対面の全国研修会を開催できていません。ぜひ、興味のある方は学会に足を運んでいただき、子どもSTの仲間と顔を合わせて、神戸という街を楽しんでいただけたらと思います。



2024年1月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員



※上記の原稿は、更新準備の関係で2023年12月に執筆されたものです。

1月1日の「令和6年能登半島地震」で被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、

早期の復旧をお祈りいたします。

2024年1月5日 子どもの発達支援を考えるSTの会 代表委員兼HP担当